

P-3-10

新型コロナウイルス感染症禍におけるマラソン大会の救護所運営の経験

岐阜赤十字病院 麻酔科¹⁾、岐阜赤十字病院 医療社会事業課²⁾

○山田 忠則¹⁾、高橋 敬明²⁾

2022年4月、新型コロナウイルス感染症（以下COVID-19感染症）禍において第11回ぎふ清流ハーフマラソン大会が開催された。当院は第1回大会より救護を要請され、ゴール脇の救護所を運営し、ランナーの救護にあたっている。また、救護所運営は災害時の現場救護所運営の参考になるため、当院のDMAT隊員や救護班要員を中心に災害時の訓練を兼ねる形で参加している。今回はまだCOVID-19感染症が終息を見ない状況の中で大会で救護所運営をしたので報告する。参加ランナーは事前にPCR検査陰性を確認し、体調チェックを受けたうえで出場となっていた。事前検査で13人陽性で陽性率は0.63%であった。我々のチームは、ゴール後の虚脱状態のランナーを対象としてゴール脇で救護所を運営した。受け入れ時はPPEを着用し、ランナーは1m以上離れてテント内へ収容した。混雑時はランナーとランナーの間に防水シートを用いた簡易のパーティションを作成し使用した。当日は大会史上初の雨天で気温が下がり、下腿のけいれんを起こすものが散見され、対応に追われた。熱中症や運動関連性虚脱の対応はなかった。例年と比べ、救護対象のランナーは少なく、病院搬送もなかった。しかし、寒さの訴えや下腿けいれんなど、今まで対応できなかった救護対象があり、天気予報で雨天の可能性は予想されていただけに想定が甘かったと反省させられた。感染症対策は計画通り実施したが、対応したランナーの数が少なく、その有効性までは評価が難しいと思われた。

P-3-12

医師の負担軽減と適切な救急入院対応を目的とした当直体制の改善

福井赤十字病院 教育研修推進室

○内田 一美、近藤ひろみ、小松 和人

【はじめに】

当院の当直体制は、外科系、内科系医師のいわゆる院内全科当直と、産科・小児科ほか全診療科の呼び出し体制で成り立っている。当直医師は、本来の院内当直業務に加え、救急外来診察をし、必要時入院主治医を担う。当直翌日午後には帰宅を推奨としているが入院させた患者の対応に追われ、医師が負担と感じている実情がある。医師の働き方改革を踏まえ、当直医師の労働環境改善と夜間救急外来における適切な入院対応を目的とし、体制改善に着手したので、進捗状況を報告する。

【目的】

全国赤十字施設、および、当院の常勤医師を対象として実態調査をもとに当直医師の当直翌日の入院患者振り分け体制を確立し、夜間救急外来における適切な入院対応を実現する。

【方法】

全国赤十字施設、および、本院の常勤医師を対象として、「夜間救急診療体制に関するアンケート」を実施し、特に当直翌日の入院患者の振り分け体制を中心に検討した。

【結果】

アンケートは赤十字病院90施設と本院の常勤医師135名に実施し、赤十字64施設（回答率71.1%）、常勤医師89名（回答率65.9%）からの回答を得た。アンケートの結果 53%の施設が全科当直体制であり、95%の当直医師が負担を感じていた。また、入院翌日の主治医決定には66%の医師が苦勞していると回答しており、その対策を講じていた施設は35%の施設であった。当直翌日に業務を離れられていたのは25%の施設であった。当院では、診療業務検討会を新設し、アンケート結果を参考に「当直明け用内科系振り分け困難患者の受け持ち担当表」の案を策定した。

P-3-14

もっとクロス ジョイントERU！

福岡赤十字病院 看護部手術室

○川口真由美

【はじめに】現在、日本赤十字社には外国の文化や慣習を理解し、受容性と寛容さを持ち合わせた国際救護要員、開発協力要員が登録され、諸外国へ派遣され活動している。今後、日本赤十字社は大規模災害が発生した際には病院型ERUを展開していくことが予定されている。病院型ERUでは多くの人材が必要となり、諸外国の姉妹赤十字社などの海外の派遣要員と活動する機会が増えてくることが予測される。そこでもっとクロスできる人材のあり方を検討したい。【事例紹介】2021年10月よりフィンランド赤十字社の展開する病院型ERUに手術室看護師として派遣された。病院型ERUではフィンランドスタッフと現地スタッフだけではなく多国籍の赤十字に所属するスタッフが活動し、共同生活を行った。【考察】今日の世界のグローバル化、およびそれに伴って生じる価値観の多様化は、医療現場における活動やコミュニケーションにも変化をもたらしつつある。一方の働き方を無視し、理由なく強要すればもう一方の働き方をする人々からの反感を招き、職場環境を悪化させ全体のパフォーマンスを低下する恐れがある。そこで仕事のスタンスが違うことをお互い認識しあうこと、またお互いが合意できる働き方を一緒に模索することが望ましい。赤十字は、厳しい環境下においても、人道を達成するために一人ひとりの人間に寄り添うことが求められています。日本赤十字社のチームは、一緒に活動する仲間と円滑なコミュニケーションを図ってチームワークを機能させることができるチームの一つである。【結語】私たち、日本人の、そして赤十字としてのチームワークでもっとクロスしたジョイントERUの活動を期待したい。

P-3-11

記録監査表からみた救急外来看護記録の現状分析と改善への取り組み

沖縄赤十字病院 救急検査部門

○金城 香織、知念 大空、仲村 大作、知念 愛花、下地 美咲、土屋 一子

【目的】救急外来看護師のケアの一貫性や病棟看護師との連携を図るために、記録監査票の看護ケアに関する救急看護記録を見直し、標準化を目指す。【方法】1. 対象者 救急検査看護師18名 2. 記録監査の実施 1) 来院の目的 2) 紹介状のスクリーン 3) 症状・バイタルの記載 4) 医師の説明記録 5) 患者・家族の反応の記録 6) 看護師の支援内容の記載 7) 書類サインとスクリーン 8) 検査中の看護記録 3. 課題を抽出、テンプレート作成し電子カルテ登録 4. テンプレート導入後の記録監査、アンケート調査【結果】記録監査表の実施率は5)、6)、7)が低い結果であった。記録監査表の項目を組み込み救急初期対応に沿った内容でテンプレートを作成した。テンプレート導入後に再度記録監査を行い、すべての項目で上昇を認めた。また、患者の状態や実施した看護とその評価を時系列で記録しやすくなった、救急看護師間の情報共有に役立った等の意見が聞かれた。課題として、IC後の反応を記録する項目・枠があったほうが、より意識して記録することができるという意見もあった。【考察】救急外来において第1印象、バイタルサインから緊急度の判断を行い、必要な処置や検査、初期治療開始の流れの中で、スタッフや医師との情報共有が必要でタイムリーな記録の人力が求められる。テンプレートにより記録を標準化したことで、救急看護師のケアの一貫性や病棟との連携に活用できると考える。加えて、テンプレート作成前は紙媒体に看護記録を記載しカルテスキャンしていたが、その手間も省け、記録作業の効率が向上し、業務改善にもつながった。

P-3-13

取り下げ

P-4-1

難治性気胸・有癭性膿胸に対するEWSを用いた気管支充填術の効果

日本赤十字社和歌山医療センター 呼吸器外科

○石川 浩之、石川 将史、池田 政樹、福井 哲矢

【背景】低肺機能、高齢者などの耐術能に問題のある難治性気胸や有癭性膿胸症例に対して、比較的簡便かつ低侵襲に行えるといったことから、EWSによる気管支充填術がしばしば行われている。【目的】当科で実施したEWSによる気管支充填術の効果について検討した。【対象】2017年8月-2022年1月までの期間に、EWSによる気管支充填術が施行された10例（難治性気胸 7例、有癭性膿胸 3例）。男性 8例、女性 2例、年齢48-90歳（平均68.7歳）。【結果】充填回数（1/2回）5/5例（平均1.5回）。EWS使用回数1-8回（平均3.9回）。充填術後癒着療法あり6例。治療効果（成功（ドレーン抜去可能）/不成功）：難治性気胸 4/3（57/43%）有癭性膿胸は3/3例（100%）。不成功3例のうち1例は手術にて治療したが、2例は死亡した。合併症あり1例（無気肺による低酸素1例、EWS抜去にて改善）【まとめ】EWSによる充填術全体の成功率は70.0%、高齢者、終末期担痛患者では成功率が低かった。充填術のみで気漏の完全消失が得られなかった症例も、気漏減少により癒着療法が有効に行え、ドレーン抜去可能となった【結語】EWSによる気管支充填術は、手術適応に苦慮する難治性気胸や有癭性膿胸に対して有用な治療の一つであると考えられる。